

パグウォツシユ科学者から  
日本学術会議への要望書

原水爆をはじめ科学兵器の異常な発展によりわたくしたち人類は戦争を廃棄するか、人類が絶滅するかという重大な危機に直面しています。一九五五年のいわゆる「ラッセル・アインシュタイン声明」は全世界の科学者が、その属する国の社会体制、自らの信ずるイデオロギーの相異をのりこえ、ひとしく脅威をうけている人類の一員としての立場にたしかえり、この危機を打開するために力をあわせて努力すべきであると訴えましたが、このよびかけに端を発し、米ソをはじめ東西科学者の参加によりすでに五回にわたってひらかれたいわゆるパグウォツシユ科学者会議が、基本的観点についての高度の意見一致をみせ、著しい成果を収めていることは周知のとおりであります。とくに一九五七年七月カナダにおいてひらかれた第一回会議が発したパグウォツシユ声明は、原水爆実験によるフオールアウトの危害についての一致した見解を示した点で原水爆実験停止への路をひらくきっかけをつくりました。又一九五八年九月オーストリアでひらかれた第三回会議が発したウィーン宣言は人類全体をも滅しうるような大量殺りく兵器の出現のもとでは、力のバランスによる平和維持がいかに危険なものであるかを強調し、武装平和という人類を破滅にみちびく古びた幻想にとらわれた人々の蒙を啓き、最近における東西間の雪解けをもたらず上に大きな力となったものと信じます。これらの成果をかえりみると、わたくしたちは、パグウォツシユ会議のような性格をもつ会議がいろいろな形と規模をもってくりかえし開かれることがいかに重要な意義をもち、またいかに必要であるかを痛感いたします。

日本学術会議がパグウォツシユ会議の果した重要な役割を認められ、二度にわたってこれを支持する決議が行われたばかりでなく、絶えず同じ線に沿う努力を重ねられていることは、わたくしどもパグウォツシユ会議に出席し、パグウォツシユ運動の一翼を担うものにとつて大きなよろこびであり、深く感謝しているところでございます。ところが我国においてはなお武装平和の幻想が多くの人々の心の中に根深く残っており、パグウォツシユ会議の成果が未だ充分ひろく一般に滲透していないのはまことに残念なことだと思ひます。この時に当り私どもは日本学術会議がこの問題を真剣にとりあげられ現代における科学者の果すべき責任についてひろく全国の科学者とともに討議をくりかえされ、人類の危機を克服するために適切なる措置をとられるよう強く要望します。

一九六〇年四月十九日

湯川 秀樹  
朝永 振一郎  
三宅 泰雄  
坂田 昌一  
小川 岩雄

日本学術会議会長

和達 清夫 殿